

## 「神様が見てくださる。」

### 1. 教育を考える一言

教育という近代的な内容にはとてもそぐわない、やや風変わりな一言を掲げるのは、少し気恥かしいような気もしますが、大学の卒業式で学長から贈られた、餞の言葉のタイトルが、私の上げた一言です。私は今日まで、この言葉を自らの教育の支えとして、生徒や保護者と接し、同僚とともに働き、そして貧弱ながら若干の研究発表も続けてきました。今さら言うまでもないことかと思いますが、教師の仕事は努力がそのまま成果につながらないことが多いものです。その上、いくら誠心誠意語ったとしても、ニヒルに流されてしまうこともしばしば経験します。しかし教育の原点は相手と話すことであり、話すことによって教育の幅は広まっていき、その実践も重ねることができるようになっていくものと考えます。ただしこれには、話せば話すほど誤解されたり、人を傷つけたりするリスクを背負うことも事実です。そしてこれを十分に承知の上で、少しでも多くの生徒や保護者や同僚教師などと語りあわなければならないのではないのでしょうか。努力が裏目に出ようとも、皆に誤解されようとも。ただ「神様が見てくださる。」と思えばこそ続けられると、今振り返っても思います。

### 2. 背景

この言葉を贈ってくださった、恩師の田中卓先生は、純真な古代史家です。終戦とともに自ら東京大学國史学科を去った、主任教授、平泉澄先生の師事を最後まで貫いた信義の人でもあります。そのために、戦後流行した唯物史観とその一党の者どもに敬遠され、なかなか報われませんでした。私は先生の話聞きながら、この言葉に評価を顧みず研究を続けていた先生の無私の学問が凝縮されていることを了解しました。私はこの言葉を贈られた数週間後に教師となり、岐阜県の高등학교に赴任しました。田中先生は1923年生まれ、満89歳になられ、この正月も年賀状をいただきました。感謝するとともに長寿を祈念しています。

### 3. 考察

私は宗教には全く無頓着であり、ここで理解した神様は天照大神でもお釈迦様でもありません。ましてやリンカンがゲデイスパーグの演説で自由を与えたとする、西洋人にとってのゴッドでも決してありません。むしろ、このゴッドを福沢諭吉が『学問のすゝめ』の冒頭で意識、新たに表現した「天」として理解できそなうなものと考えています。私はこの後もこの「天」に包まれて、教師としての人生を進めていきたいと思っています。

#### 参考文献

福沢諭吉『学問のすゝめ』岩波書店、1942年

高木八尺『人権宣言集』岩波書店、1957年